

「『舞姫』を読んで」

高校三年 戸田 江美

豊太郎は優柔不断であったが故に、悲恋の結末を招いてしまった。岐路に立つ度に優柔不断を積み上げ続けた彼の行為は、最終的に責任転嫁の確信犯と言える。

我が脳裏に一点の彼を憎むところ今日までも残れり。」

エリスに豊太郎の帰国を告げたのは相沢である。この一文は、一見エリスの発狂の原因は彼であると言い切っているように見える。だが、私はこの作品を読み終えた時、この一節に豊太郎の「自己嫌悪」を感じた。彼はエリスへの良心の呵責を感じつつも自らの出世を選ぶ。その事実を伝えられない優柔不断さが彼女の発狂を招く。エリスへの未練を手記に綴り、やり場のない自己嫌悪を、エリスに事実を伝えた「相沢謙吉」と記したように感じた。豊太郎は、最後の一文で相沢を通して自分への恨みを綴ったのだ。

彼は治る見込みのないエリスをドイツに置き去りにして初めて、自己責任を感じたのではないか。その思いで手記を綴ったという行為は、自分への戒めが含まれているだろう。さらに手記を読む第三者の目を意識しているようにも考えられる。誰かに一連の出来事に対して同情して欲しかったのではないだろうか。手記全体からはどこか自己を擁護するような言い回しが見られる。私はそこから豊太の自尊心を感じた。弱きまことの我」に気づいていても、大臣にまで認められる有為のプライドは、高いものであったと思う。私はこの手記を不快に思わずにいられない反面、自分自身に通じるところがあると思う、ハツとした。豊太郎の優柔不断さと自己弁護は、私だけではなく多くの読み手にあてはまる。自己保身のために他人の意見に合わせがちな現代人の傾向。それは「責任逃れ」とも言える。それを重ねた上には相沢の結果、つまり人に流され自我のない空っぽの状態の自分の形成があるのだと気づかされた。それ故に私は豊太郎を否定しきれないのだ。誰しもが豊太郎のようになる可能性があり、現に彼の弱くふびんな心を大抵持ち合わせている。だが、同情は出来ない。エリスとの恋は豊太郎によって別の結末を迎えられたはずだ。人ひとり、ましてや自分の子を身ごもった女性の人生を狂わせた責任は非常に重く、逃れるべきものではない。相沢は豊太郎に、旧友として救いの手を差し伸べた存在であり、エリスの発狂を確信的に起こしたわけではない。ただ彼は、豊太郎とは反対に無神経であり、女性観が異なった。豊太郎の恋は、一種の惰性と言い放った。そのような相沢の考えにより、豊太郎とエリスの円満な別れは実現しなかった。

当時の日本の青年が歩む、立身出世のみを見据えた道から脱却しようとする豊太郎は、結局封建制度の象徴であるかのような相沢により制度の中に帰る。豊太郎は大臣の誘いを受けた時、名誉を思った。たとえ彼が優柔不断であったとしてもその一瞬、恋愛より出世欲が勝ったということだ。日本での立身出世という山がいくら重霧の間

にあるうと、捨てがたきはエリスが愛」と思おうと、目指すべきはその山であると常に無意識に思っていたのではないか。母がなくなつた時、帰国よりエリスを選んだことはただの反発精神のように感じる。自分を「生きる辞書、法律」にさせようとする周囲への不信感をようやく覚え、自分の弱さに気づいた地であるドイツに残ることこそ、「自我」であると思ひ込んでいるように私は思った。時が経ち、豊太郎は自分の学問が荒むことへの慚愧を募らせ、妊娠したエリスへの愛情に冷静さを持つ。ドイツで一種の思潮を得て知識を知恵と成した彼がその能力を遊ばせるには惜しいことを、彼自身が一番感じていただろう。そして彼は、出世よりエリスを選んだ自分の「我」を捨てる。豊太郎は社会や秩序と自分自身の摺りわせ——自我の目覚め——が遅かつたが故にエリスを失つたのだと思う。本当の自我に気づき、そして思考の末に辿りつく自分の理想像に早く気づいていたならば、この恋はさらに別の結末を迎えたであろう。彼の性格や育つた環境から考えて、異国での舞姫との恋ははじめから成就し得なかつたのではないか。

立身出世を一番と考える当時の日本の制度と、自我の確立の狭間で揺れる青年を、豊太郎の原型である作者の森鷗外は自身の体験により筆した。当時の青年が自我を貫くことは相当難しいものであつた筈だ。家のため、国のために生きるという教育が施される中で、それに反する意志を貫くのは並大抵の精神ではない。この制度と自我の対立は、立場は違えど、今に生きる私たちにも共通する。学校から社会の制度に変化した時、新たに様々な困難に遭遇するだろう。その時、制度と自分の在り方に悩むのはこの作品が書かれた百年前の青年達と変わりない。私は制度や秩序の中を生きる上で、自分の志気を見失わない人になりたい。

森鷗外著 『舞姫』のあらすじに

若くして学士となり、某省よりドイツ留学を命じられた前途有望な官吏、太田豊太郎。ベルリンの大学の自由な空気に触れ、新しい自我の目覚めを感じるが、踊り子エリスとの恋愛を事由に免職される。エリスとの楽しい生活をとるか自分の将来をとるかという苦しみの中、帰国を決意する豊太郎、それを豊太郎の旧友相沢から知らされたエリスは、発狂するという悲恋物語。